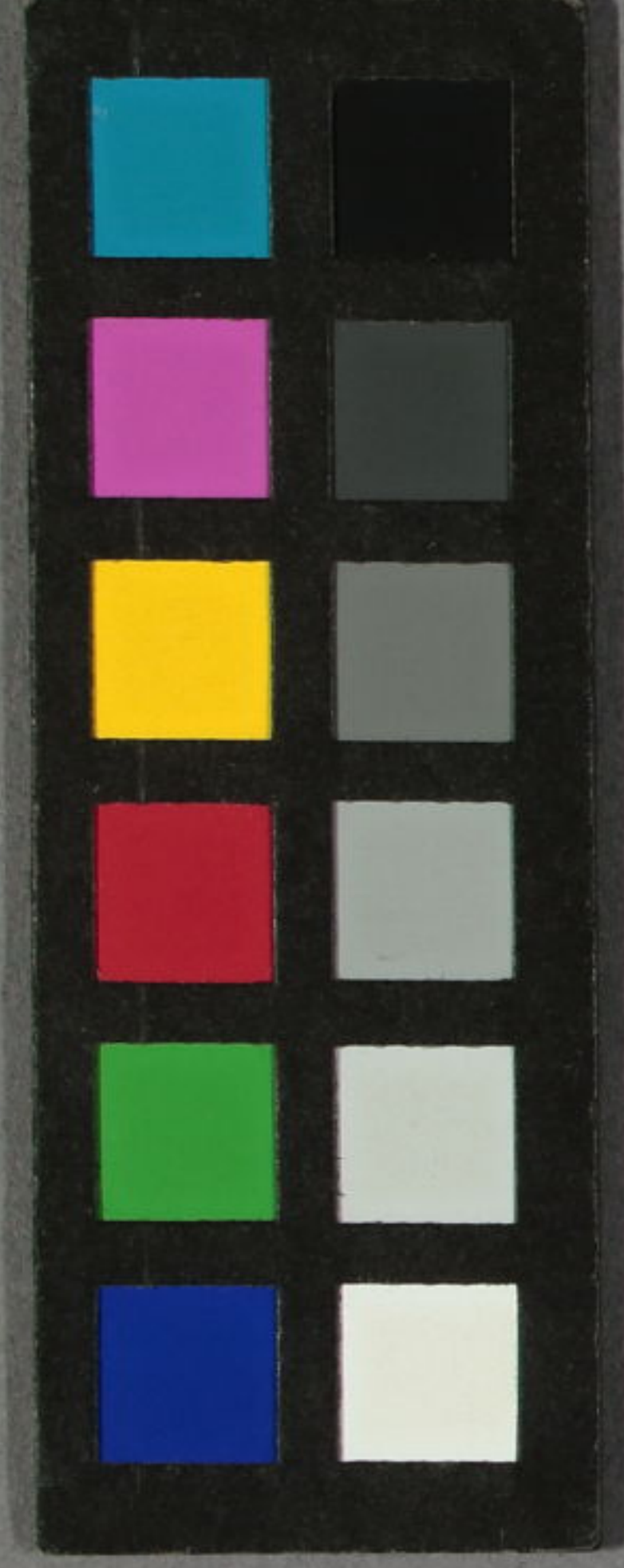


玉川日記 三四編 上

^ 13

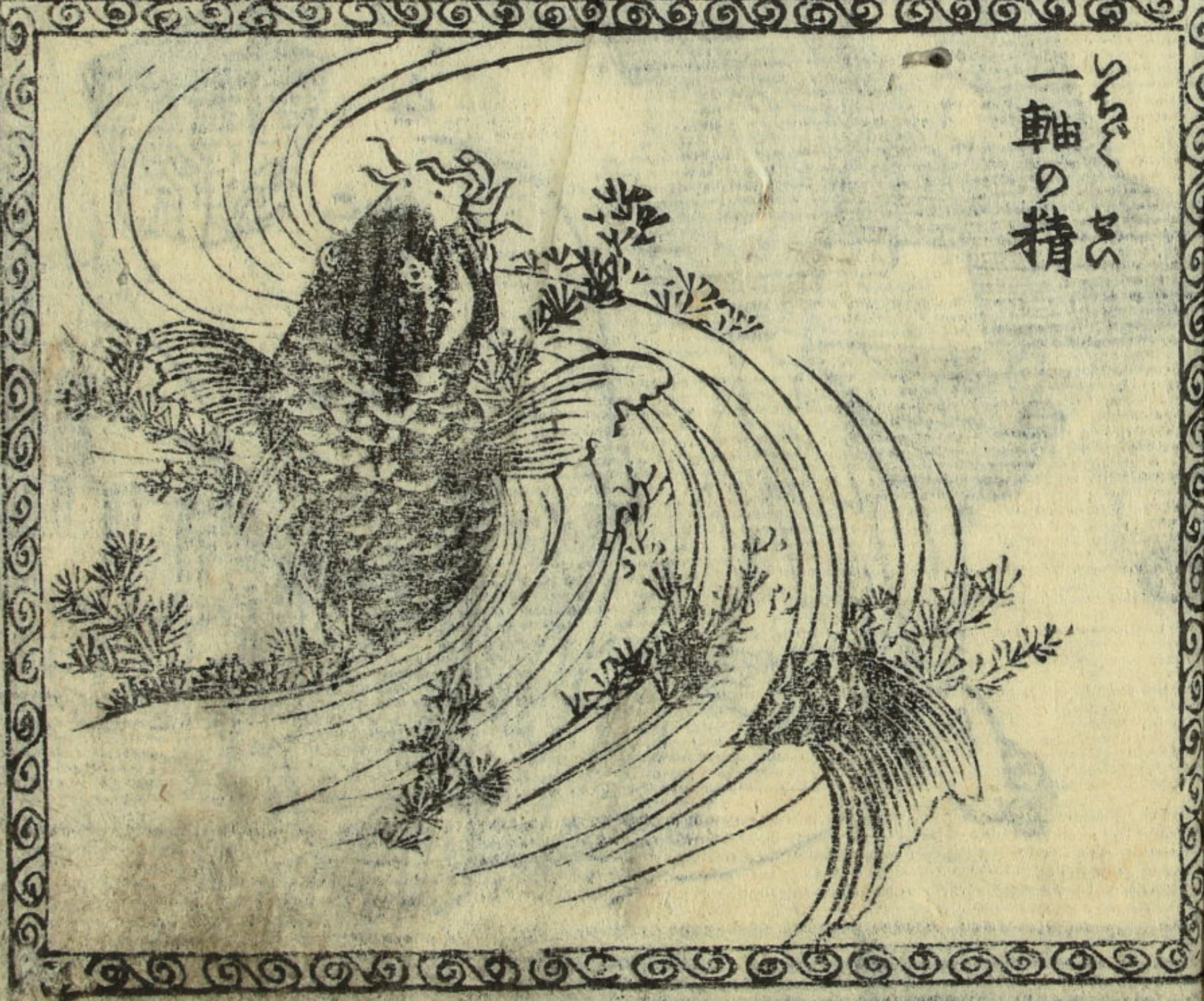
3188

7





Red seal impression: 三浦氏印 (Seal of the Murauchi family)



一軸の精 (Spirit of a scroll)

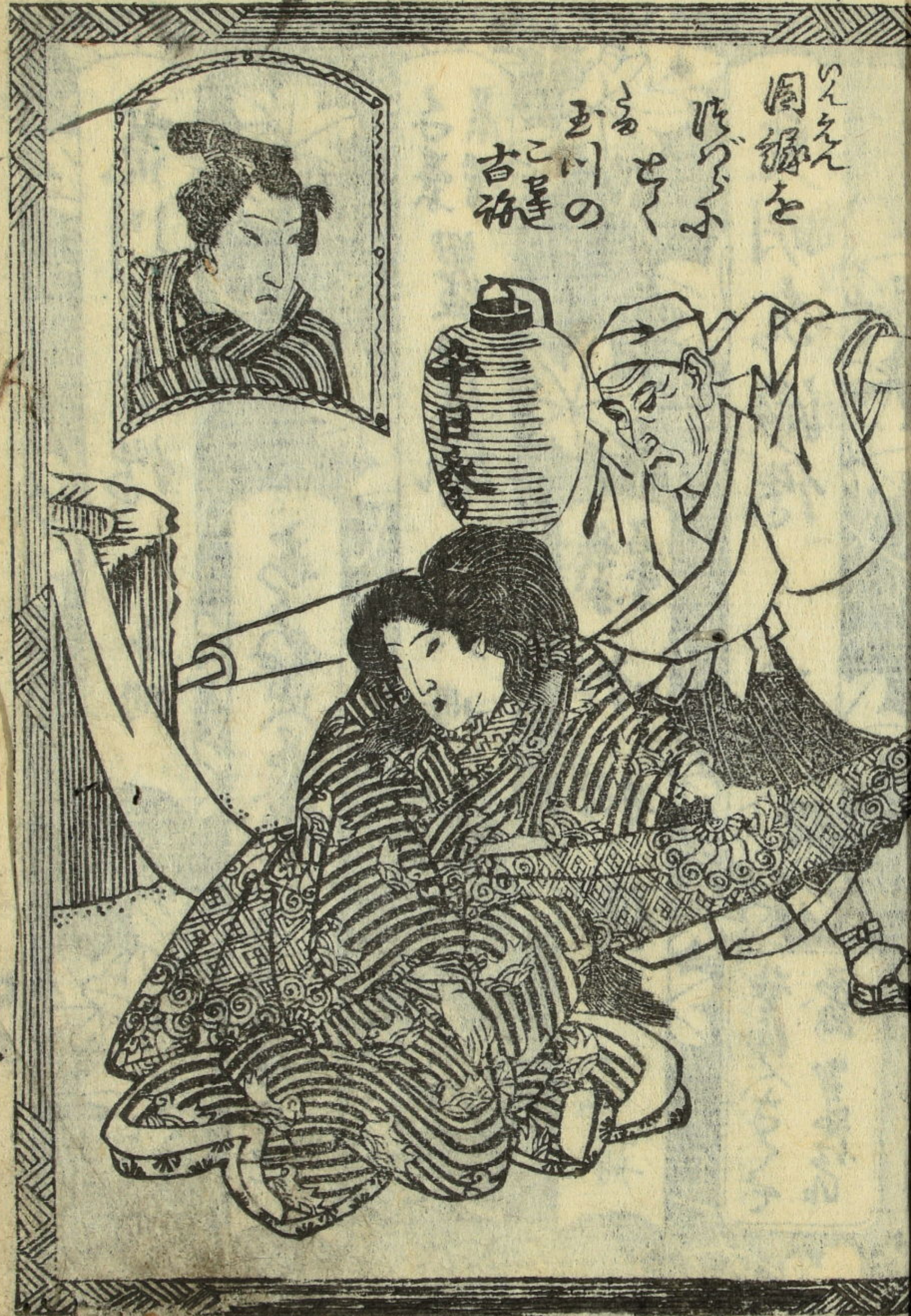
川 (River)

明 へ 13
3188
7

式移色冊之海

松下

昭和十
六月二十五
興



荒川仁勇傳

十冊

あふ火之儀

一名元山隱忠傳
十冊

子素
星月縁

六冊

義五
十杉傳

初編五冊

文明の海傳

六冊

藝文
西條半右衛門

玉川日記四編卷之上

江戸・南仙舎楚滿人作

第一回

白樂天歎く。かまそ人女子と生まるる勿し是ととと。
 身に才さゆるも才さるも。めのハ美び悪あくをいはさすし。
 夫あの禍わざ福ふくにあここハは法は護ごりの氏うぢさくえ。出いの
 あらに乗るの少すくさく。行いひに不ふ正せいのまを家をよる。
 親うぢ族しゆに離是い不ふ善ぜん人に身みをまうせ一い生せいとわる。

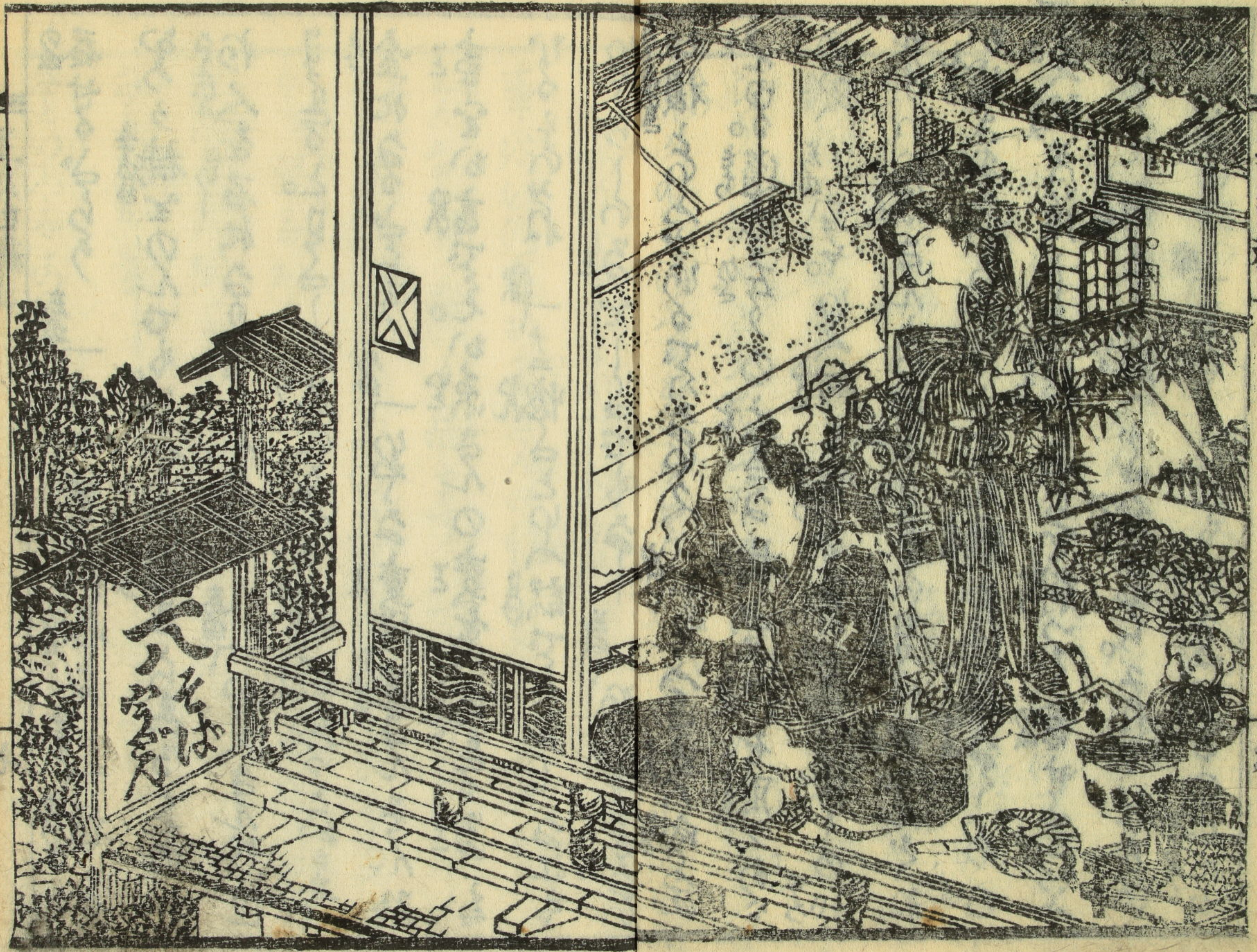
多岐の愛に多岐の孝。孝は日ならず。各私情に惑
 にあり。慎まざるはあつた。百年の苦樂を
 他人に。波無き野のまぐも。人の穢つもの免
 る。道る。嗚呼。千歳不朽の確言。さあ
 さ。世を人の縁。一ふ。過去より。定めて月下
 氷入の心。さあ。さあ。さあ。因縁。や。
 月。思ひ。深。深。深。金井。橋。ふ
 う。契。ひ。立。し。り。や。く。あ。の。露。の。身。や。あ。そ
 耶。世。と。ゆ。ひ。し。命。を。今。ハ。き。鳥。カ。を。ま
 是。ゆ。仲。に。満。さ。と。い。水。さ。も。風。さ。ら。て。さ。い
 や。浪。乃。玉。々。い。げ。あ。り。家。路。旅。を。ま。た。ら。鳥
 吉。と。名。の。ひ。り。そ。海。よ。よ。る。灘。の。浮。き。あ。ひ。さ。い
 行。方。を。定。め。ひ。ど。跡。を。追。入。の。か。ら。ん。と。さ。あ
 を。り。う。ら。天。の。の。り。く。あ。や。め。く。降。る。一。む。う。雨。二。人
 諸。共。ゆ。き。に。よ。る。所。小。橋。へ。さ。さ。さ。く。く。ま。い。を
 さ。り。く。立。と。あ。り。中。深。次。郎。さん。日。さ。し。れ。心。を

疑乎に。よふ笑分そくさんすく人目を奪のんで
 夜に紛ま何國へりとも身をかす。暮るる真
 実嬉しけまど只氣にかるハ先刻にわひの親
 思さぬの事。その宝物とやら掛ものとかうか。さうで
 も出のバか屋しと入。サアすぬぬよよめく氣がきさ
 なる。假にを男とままて身の大切の品をわひ
 にく奪はまてとる面さげく内へ歸らます。チト
 心當りた所もあるから。むとまけはとていふひに。

田舎の中仙るの方へ行て尋ねる。ましも
 まか知さぬさうだ。まのら名のつくぬ。罪にから。
 親父孫故。おをさるぬ日ひ。先刻もそまを奪しつた
 けはまのまらにもたれぬと。其方の隣の公根を。
 何ぞさうさうく。まもらひとまを百目とらハ眼りれぬ
 室のせんま、サアまもその時名の時でま。
 何をか罪にわかんすりぬ。まもら一生涯にあり。主
 の菩提を用ふあら。傑一敷らぬ日をまを

中々。わりのみく長る真実かうのしけぬの。ア
 さまも斯ういふが因果はく。悪縁と何きうら
 て。一嶋吉さんいひまをえかかえりく。まやアな
 ら後へいよ。あま「そんな変なりくかあえんうさし入
 倦くおれでまの。深「そのやアあうあるうらぬやア死
 るるむと月蓮の上さ。あま「うまーいよ。そまらそつと
 先刺の火をえんぞありや。深「まじやよ。
 かめが怖がるぞらうとをいひく言秘へる。あま「下よ

のららうくかひせ。ヨウまらせくかま」といふのに
 深「斯さ。室と露くむといへうらぞ目外か屋敷
 くらぬりの。鯉の掛まの張奪をまて。時金七が死
 骸を埋めこま井がアしおれ松の下にひるが思を
 その亡魂が。いまう陽間にまらて。あま「銀たを
 まへこのう。深「二圖にありう忠義のゝあなしお
 我を主人と大切にわりのあまう今の今。再ひ
 現に現し。不意の難をまらひ。あま「



八十九

五月廿九日

斯る短後よりと斬一連と来るも。
 いづきと田舎の商人紳。さきとも洒落く連中
 荷物ハ小荷駄の馬につけ。短きハ太刀とさ
 めく。藤々の草履張穿く。駕を吉野樓より
 帰せしと見えし。上の奥板 佐美 子イ番さん。
 駒澤先生。昨夜勞ぐまご眼が 奮一そのや佐太
 えぬんふのどとらう 家一ちげんおせせん。ゆふべ
 つるしぬ 鳥嶋さんと笹赤さんが起しうすのどとらうぞ。

茶飯でもさんでも起らばぬと云ふ。まご使者
 とも歸し云ひ。今朝の容子で。いよく 出ま
 る門とらう。そのきぬぐと晴んどの 佐一そのや
 橋本さんさんとのこと。やんに茶飯張と云ふ
 番新が起しこの張。はばは眾の油のくわ池
 さんと番さんに起るのよ 佐一「日とらう」
 たりたり成中をるのう。宿碑ぐまらうが 巻下

ともいふに。まよひぐ手水とほふ時ものんた
 ちうくし。ちうや。あねに酔この
 ちう。堀うらあめでも土手の中張あむらう。
 すぐさまと猪牙に乗諾し。刻へ居つひらう。
 一日二夜乗はひごその夜。ちうとく碎そふるの
 さ。一。おさんものう。ねやうでもねあ。一。馬
 ちや。幾と出らう。その野為。知らねが。馬
 ても材木張のくもまんご獨り。忠度とのみぞ。

寝る後。離。ね。つ。う。ま。く。り。の。せ。佐。一。サ。ア。く。
 大。ん。と。一。着。一。る。に。紙。あ。この。佐。一。溝。活。の。若。
 且。下。一。の。ま。ま。と。一。玉。章。と。着。一。々。玉。樓。の。五。郎。入。
 道。一。着。一。ウ。み。郎。入。道。ハ。一。佐。一。あ。毛。例。の。紙。入。ま。に。
 入。ま。て。こ。ま。う。着。一。わ。う。大。奉。る。ま。の。ぐ。も。あ。て。この。う。ま。
 一。仕。切。占。入。ま。六。志。る。う。の。て。う。佐。一。る。に。も。大。う。の。ま。
 物。ハ。入。ま。て。く。ら。一。さ。着。一。南。新。屋。へ。着。一。う。
 一。ま。ふ。の。け。く。女。房。せ。か。が。志。ま。る。く。着。一。る。佐。一。を。

中もあや言ぐもあつてさうぞう。えんと跡ぞらあ茶屋の
 南部樓とさあめようぜ。後「ア、紙入ハ東便未鬼の
 旁へさうくやらう。佐「ア、のつぎもやア異濱へむら
 同伴くらん後。後「ま、こらけるのう。佐「ナ、自惚ハ
 志のへがノ。櫻川ぐ諸るおまの事ハ聞くとんね
 家「あの田舎が花生亭の方へ葉を成贈つことだ。
 外に一包の紙がわり中。えんどうとわの門く願く
 見ると丁子車の轡とがたさ尻添のりに。後「丁
 子車のりとどのあ。佐「そま通り。油町の木戸際に
 番「ア、ゆきさ紅門くぬるヨ。追く弘まのく今女目
 よ余わど賣まるかうすど。後「そりやア糸三とのあ
 でナ。毎一人が退くあやましくあるの。み年むのり
 跡中ぞら紅入ぐさくツちやア兼知しるうとあか。
 今ハあやましく人と白のどぐさくしてハけるぬかうに
 なる。全解ハあの紅入とりのあつらぬうと。佐「
 町のよま紅入もあつた。そまハ某種のかうすが

五川四編上

十三

いづれかのものち猶然残日にほそく。急げや
きそく とも本曾路形る。深谷の歌に着けるか。公海りの
あや 人張向ふに先に不用ありとく上方へ移るあるが
あま 女くつろの来る登しとのた。その者をもとより
あま 獨りこく。あに修る古物をされば思ふに都へ
あま のがうし。借りの酒を售んそく。持て行くあるより
あま あうさる。これををまをまをらうとて。えりく詮義の
あま 手かきを失ふにむる。一圓度以身とせしむ。
あま 渠が歸る夜露よとと。何氣らくとて。て

こ乃在郷に程近に園田村とのふさるに少くも
あま 家ある張借りえ。あに院住居をうし。て
あま ながくもまがりの人の帰るをまつらに密に
あま 人の噂りえ。故郷の便り張きつに親類のまめ
あま より又百日の猶縁をねえひえ。尚時日の金に
あま 移りさるす。聞くとと方ほひ。まをうく
あま ありけるうち。原泉期し方奉るう。病人と

まり。此乃僅の貯へも今とてや。残り少く
 まり。ゆけを。田舎の事。名は活葉もき。やとく
 感へく。居るうち。深次郎も不圖時の氣の流行
 風。たまくち。臥さうが。漸く重く。はひ。重く
 とまり。け。はひ。残り。金。そのの。某。代
 多。は。ひ。髪。乃。上。り。衣服。も。鬻。食
 今。と。二人。も。褌。衣。身。に。ま。ひ。い。ま。け。た
 帯。の。え。に。日。夜。寝。て。病。ひ。の。愈。ら。ぬ。を。か。ぬ。ま。と
 迎。知。の。人。死。ま。の。あ。ま。う。く。小。縫。ま。の。あ。賃。は。事
 一。の。ら。う。と。ま。ま。う。く。は。を。潤。甘。を。藥。礼。乃。は
 高。も。や。く。前。向。の。前。に。あ。ひ。ま。う。不。沙。汰。の。道。は
 因。師。も。怒。り。く。その。後。六。葉。も。い。え。ず。か。買。の。ま。と
 馳。中。う。く。焼。懼。の。後。ひ。と。門。を。ら。無。知。く。星。夜
 洗。ひ。ま。う。ま。う。十。日。は。一。度。り。二。度。割。り。た。仕。立
 その。み。針。よ。を。わ。き。き。け。り。を。も。揚。の。ま。う。り
 貧。苦。の。く。ま。と。ま。その。間。ま。東。遊。て。ふ。測。の。ま。う

